

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2690100058		
法人名	アサヒケアサービス株式会社		
事業所名	グループホーム安らぎ 1階ユニット		
所在地	京都市西京区御陵谷町29-2		
自己評価作成日	2024年2月16日	評価結果市町村受理日	令和6年4月24日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/26/index.php?action_kouhyou_detail_022_kani=true&jigyosyoCd=2690100058-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人京都ボランティア協会
所在地	〒600-8127 京都市下京区西木屋町通り上ノ口上る梅湊町83-1「ひと・まち交流館京都」1階
訪問調査日	令和6年3月7日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

令和3年12月に北区玄塚から西京区に施設が移転しました。施設は京都ではじめに開設されたグループホームと言われており、建物の老朽化が著しいための引っ越しとなりました。地域密着型施設の移転ということ、コロナの流行とが重なり、なかなか地域との交流も持てずにおりましたが、ようやく令和4年度の3月に地域の方々に参加いただいた形で、運営推進会議を開催できました。改めて高齢の方がたくさんいらっしゃる地域であることもわかり、将来的には、共用サービスを始め、入居されている方だけでなく、地域の食事や入浴にお困りの高齢者の方にも利用していただけるような施設にしていきたいです。看取りも視野に入れた最後まで手を離さない支援ができるよう、力を入れています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当事業所が現地に移転してから2年余になります。長らく事業所内に新型コロナの罹患者はなかったのですが、昨年7月と11月に新型コロナとインフルエンザに見舞われました。そのため一部計画を変更して、七夕祭り、腹話術ボランティアを招いての敬老行事、ハローウィン祭り、クリスマス会、正月のすごろく大会や豆まきなどの行事を楽しみました。また、食事には利用者の意向を取り入れた献立を立て、時には手作りおせち、ハンバーガーや寿司のテイクアウトなどで特別感を演出して喜ばれています。一方、昨年からは運営推進会議や防火・防災訓練にも地域住民の参加や協力が得られるようになりました。平均介護度3.6という利用者の重度化の中で、地域との連携の重要性を再認識し、近々開始する共用型デイサービスでも地域との共存を目指しております。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員の目につくところに法人理念を掲示している。会議のどの前には全員で唱和し、理念の精神を確認している。	「人は人のためにある 人のために尽してこそ人」の法人理念及びホーム運営理念を1階事務所や2階に掲げ、毎月のホーム会議で全職員が唱和している。パンフレットやホームページにも開示している。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	令和3年12月に北区から施設が移転したが町内会に所属し、回覧板や配布物で利用者にも関係性のあるものは見てもらったりしている。	町内会に入り、回覧板等で地域の情報を得ている。地蔵盆のくじ引きなどに行っている。腹話術、尺八のボランティアの来所もあった。近くの小学校の地域防災訓練に管理者が参加している。正月に事業所前に佇んでおられた地域の要援護高齢者を他事業所のスタッフとともに支援し、現在も家族支援を継続している。共用型デイサービスに地域の方の受け入れを予定している。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	看板にも介護に関することは何でも相談できるような文言を記載して地域にアピールしている。施設前の自販機の横に座れるスペースを作り休憩場所を提供し施設を身近な場所として捉えてもらうようしている。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	近くに住んでいる町内会長や連合会長をはじめ地域包括支援センターの方や近隣施設の人にも参加してもらえるようになった。そこでホーム内の報告や情報交換を行いサービスに活かしている。	運営推進会議は北部地域包括支援センター職員、学区自治連合会会長、町内会長、近隣のグループホーム2カ所等を招いて開催している。入居者の状況、ヒヤリハット、事故報告、行事風景などの資料をもとに話し合っている。議事録は参加者と行政に配布し、家族には、内容により半年に一回程度送布している。	盛りだくさんの行事や話題で活気のある時や、逆に話が弾まない時など、いろいろな会議がありますが、事業所の透明性を高めるために、議事録や資料は毎回全家族に配布されるよう期待します。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	地域ケア会議に参加し、存在を知らない方も多いので自施設のことを紹介するとともに、地域の問題にもふれ、何か施設として協力出来る事はないか模索している。	2か月に1度の西京区サービス事業者等連絡会に参加して事例検討や地域の課題を話し合っている。行政と生活保護の利用者の連絡調整をしている。事故報告書を届け出ている。防火・防災訓練に消防署の立ち合いがある。運営推進会議議事録を届けている。		

京都府 グループホーム安らぎ 1階ユニット

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	どうい言う言動が身体拘束に当たるのか、法人内でも身体拘束委員会を中心に定期的な話し合いを継続している。全員参加で実施する研修会も年2回開催している。		「身体拘束に関するマニュアル」を備え、3か月ごとに本社で委員会を開催し、参加職員は自施設で伝達をしている。12月には法人の全職員研修を、1月にはホーム会議の後に事業所内研修をおこなっている。全職員がQRコードから会社に研修報告を送り、未提出の職員には管理者が提出を促している。ホーム会議では言葉による拘束などの事例を話し合い、「帰して」と夕方に不穏になる利用者にはベテランの職員が対応し、気分転換を図っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	職員間でどういった行為が虐待に当たるのか、虐待に当たるような行為の確認をし、虐待につながるような言動を職員間でも見逃さないようにしている。			
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	後見人制度についての研修は機会があれば参加するようにしている。施設内でも2名の利用者が制度を利用している。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居予定の方には事前に契約書と重要事項説明書をお渡しし、契約当日までに目をおしてもらうようにしている。その上で当日に読み合わせを行い説明や質問事項に答えた上、契約している。			
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関にご意見ポストを設置し、記入するための用紙や筆記具ヲそろえている。いつでも気づいたことを気軽に書いてもらえるようにと、考えている。		ご意見ポストには意見は入らないが、面会時や電話等で意向を聞いている。利用者からは「おつくりを食べたい」「寿司を食べたい」などの意見があり実現している。家族からは、「予約なしで面会に来て嬉しい」とか、「リハビリを受けさせたい」などの意見が出て、主治医と対応している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	4月と10月に職員と個別に面談する機会を作り、日ごろの勤務についての希望や問題を直接聞き取るようしている。		各種会議のほか、日常的に管理者が職員の意見を聞くようにしている。脱衣所にマッサージチェアがほしいという要望があり、実現している。特定技能実習生の帰国時には1か月の休暇を付与している。4週8休から休暇が増えて働きやすいと職員から聞き取った。離職率も低い。	

京都府 グループホーム安らぎ 1階ユニット

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	社労士を導入し、就業規則の見直しや勤務体制の評価をしてもらい、問題の箇所は随時改正している。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修は業務より優先されるという見解のもと、ズームなどの外部研修も含め、研修受講を奨励している。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	運営推進会議には近隣施設のかたにも参加していただいている。情報交換や施設内研修への参加の機会を双方で作るよう取り組んでいる。			
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所時には挨拶やこえかけ、個々と話す機会を設けて信頼関係を築いている。また、表情等にも注意して困りごとが無い様子を見ている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所時家族にも要望を聞き、話をすることで安心していただいている。入所後は毎月おたよりを送り今月の様子をお伝えしている。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	課題整理総括表を利用し、家族を含めた本人のニーズを分析している。そのうえでケアプランを作成している。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の体調や気分を見ながら、一緒に作業をしたり、出来そうなことは手伝ってもらったりするよう努めている。また、してくれたことへの感謝を必ず伝えている。			

京都府 グループホーム安らぎ 1階ユニット

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族にやってもらえそうなことは相談をし、出来るだけ家族に依頼している。受診や衣類の購入などを依頼し、面会の機会に繋げている。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ下の時も短時間でも利用者様と電話で話したり、玄関先で会えるような機会を作ってきた。	友人、家族の面会がある。家族などからの電話や手紙の取り次ぎ、電話をしたい利用者の支援もしている。職員と一緒に花を育てている。塗り絵や絵の好きな方には画材を提供している。以前は家族と馴染みの美容院に行ったり、外食する方もいたが、昨年の新型コロナ罹患以降心身状態が低下し、外出が困難になった方もいる。毎月担当者が家族に写真付きの便りを送付し、不定期発行の機関紙でも様子を知らせている。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	苦手な利用者様と同じテーブルにならないよう、席替えを随時している。お手伝いや物づくりレクなども出来るような時は複数で一緒にしてもらっている。			
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスを終了する理由は死亡された時なので、家族と機会があれば挨拶する程度に留まっている。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居時には本人の希望を聞き初回の介護計画に記載し職員間でその情報を共有している。	入所当初にセンター方式のアセスメントシートを用いて本人の意向や生活リズムなどを書きとめている。法人所定のアセスメントシートや課題整理総括表でも思いを把握し、要望の実現に努めている。言葉で表現の難しい方には筆談で選択肢を示して○を付けてもらったり、チラシで食べたいものを指さしてもらったり、家族に聞くなどしている。適量のアルコール類も摂取できる。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居の際はセンター方式のアセスメントツールでこれまでの生活の把握に努めている。入所までに関わったケアマネや家族にもききとりをしたりして把握に努めている			

京都府 グループホーム安らぎ 1階ユニット

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ハイタル測定や食事・水分量をケア記録として記入する以外にも、ケース記録としてその日の様子を必要に応じて記録し、申し送ることによって情報共有している。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	モニタリングは3か月ごとに実施し、担当者にはモニタリング表作成してもらっている。介護職員と場合によっては家族にも参加してもらいアセスメントに基づいたカンファをし、6か月ごとに介護計画を見直している。	ほぼ6か月ごとの介護計画に家族や後見人の同意を得ている。区分変更時や、住所地変更など、必要時には6か月以内でも計画を変更している。モニタリングは担当者が3か月ごとに実施し、サービス担当者会議で結果を検討している。職員は夜勤明けの9時か日勤終了前の16時に、介護計画の実践状況を記録してから退勤している。		「安らぎサービス計画書」では、介護職の支援内容は見えますが、その他の専門職や家族等の関わりが見えませんがどのように関わっているかが分かれれば支援の全貌が見える化されるのではないのでしょうか。ご一考願います。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録はタブレット項目ごとに記入し、職員間で情報として共有すべきことはiPadに記録の際に申し送りするの項目を選んで情報共有している。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族がお弁当を持参し居室で利用者と一緒に食事をされたり、好きなおかずの提供が家族からあればお出ししている。家族が施設まで迎えに来れない時も新幹線の駅まで送っていった。			
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の社会福祉団体が主催する行事に参加してもらえよう、回覧板などにも目をとおしている。昨年は地藏盆の抽選会に出向き、くじ引きをしてもらった。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ホーム指定医は決まっているが、希望や専門外の治療については他の医療機関を受診出来るよう、家族支援を依頼したり、職員が付き添ったりしている。	入所時に説明し、以前のかかりつけ医への受診も支援している。4月から協力医が変わり、それに伴う訪問看護ステーションや薬局の変更を家族に説明している。ケース記録に訪問看護師との連絡欄を設け、月2回の主治医の来診時に訪問看護師が利用者の状態を伝えている。協力医と訪問看護師、管理者はネットワークサービスで繋がり、利用者の急変に対応している。家族と精神科を受診する方や、職員が他科受診に同行する方もある。訪問歯科や歯科衛生士の口腔衛生指導、訪問マッサージなども受けている。		

京都府 グループホーム安らぎ 1階ユニット

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師の常駐はないが、メールなども利用し小まめに支持を受けるようしている。また、必要に応じて訪問日以外にも来てもらっている。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	指定医所属の病院に入院した場合はメールのやり取りもでき、面会に行かなくても様子を教えてもらえる。また退院の時期なども相談に乗ってもらえるので、早期に退院できる関係性が築けている。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時に終末期の方針を聞く機会を持っているが、その時にならないとわからないと返答される方は大半なので、状況に応じて、施設内で出来る対応を家族に説明し、医師の話も聞いてもらったうえで選択してもらうようにしている。	入所時に緊急時の入院先や、最期をどのように迎えたいかなどを聞いている。系列のグループホームでの看取りをきっかけに、「ご利用に際しての事前指定書」を改定している。今年度は看取りはなかったが、管理者が看取りの研修をおこなっている。実際の看取りの時は医師が家族の意向を確認し、看護師や介護職と連携しながら進めている。家族等の随時の面会や宿泊も可能としている。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救急対応のマニュアルは見れる場所に置いている。毎年1度は内部研修でマニュアルをもとに、対応を職員間で確認している。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練の定期実施。BCPの内容についてはこれから職員間で共有していく予定となっている。重度の利用者を小人数の職員で避難させるのは困難なので消防や地域の協力も依頼していきたい。	年2回のうち1回は昼間想定で火災避難訓練をおこない、2階の利用者を担架で1階に避難させる訓練をして消防署に見てもらっている。地域からは自治連合会会長や町内会長が参加している。別の夜間想定訓練では職員のみで自主訓練をおこなった。運営推進会議で報告し、家族にも半年ごとに発行の「安らぎの様子」で知らせている。地域の防災訓練に職員が参加している。備蓄は、水や1週間分の食材、ビスケット、羊羹、救急用品、衛生用品などを用意している。BCP(事業継続計画)は作成できたが見直しや周知はこれからである。		

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	トイレのドアを閉める事や、親しい利用者もちゃん付けで呼ばないなど日常生活の中でやさやかな動作を通じて、職員間で個人の尊厳とプライバシー保護を意識しながらケアに当たっている。	排泄介助中の扉の開閉、入浴時や食事の際の適切なタオルの使い方などについて管理者は日頃から職員に話している。また、傾聴する事で穏やかになるので、同様の話が繰り返されても利用者の話を無視せず、職員に余裕がなく対応ができない時は他の職員に代わってもらうなどして、尊厳を傷つけないようにも話している。不適切対応を目にした時は後で管理者が職員にアドバイスをしている。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	言葉が出にくい利用者様も含め、積極的に職員側から声掛けをし、利用者の意向や希望を引き出すようにしている。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	起床時間や入浴など、介護者と利用者の思いにズレがある場合は、利用者本位の選択が出来るよう、余裕を持ってケアにあたるよう心がけている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	着替えの際はふさわしい服を並べてもらい、本人が選びやすいよう、配慮している。2か月ごとのヘアカットも本人に希望を聞いて行っている。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	固いものが食べれない利用者様には形状を工夫して提供している。好き嫌いも考慮し、代替えメニューを用意したりすることもある。出来るだけ準備や片づけもお願いするようにしている。	献立は職員の当番制で、1週間分の献立を季節感を取れ入れ、材料を注文している。1階の職員が全利用者14名分と職員分を纏めて調理をしている。朝はパン食で、パンがゆやご飯、おかゆの希望にも応じている。好き嫌いには代替えの物を用意し、分量も考慮している。利用者の介護度が高く、十分に調理には携われないが、玉ねぎの皮をむく、シソの葉を千切る、筍の皮をめくるなどをしてもらい、シソジュースや筍ご飯などを作っている。お盆拭きや食器拭きをする方もある。七夕には素麺を提供し、敬老会、ハロウィン、節分には回転寿司の盛り合わせ、ハンバーガー、巻きずしをテイクアウトし、クリスマスにはサンドイッチ、正月にはおせち料理を手作りし、利用者の希望を取り入れた楽しい食事を提供している。誕生日にはユニット内でケーキや本人の好むおはぎなどで祝っている。時には職員とホットケーキやフルーチェなどのおやつを作っている。		

京都府 グループホーム安らぎ 1階ユニット

自己	外部	項目	自己評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々の利用者の好みや食事量を考慮して食事を提供している。水分も一気に飲めない方には回数を分けて提供したり、種類をかえた飲み物を提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の歯磨きはしないが、お茶を最後に飲んでもらい残渣物が口腔内に残らないよう努めている。朝夕には洗面所で職員が介助しながらケアをしている。定期的に歯科往診によるケアもしてもらっている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	尿意の有る方はその都度、トイレ誘導している。排泄を認知できない方については時間を決めてトイレ誘導している。おむつの使用は最小限になるよう、努めている。	排泄記録から、声かけやトイレへの誘導、居室でのオムツ交換のタイミングを計っている。2人介助の方も含め、昼間はトイレでの排泄を支援している。リハビリパンツの使用経験がなく、布の下着の失敗を気にして1時間おきにトイレに行く方があり、今は現状を見守っている。ホーム入所後にリハビリパンツから布の下着に改善できた方がいる。移動の不安から居室のトイレではなく、ポータブルトイレを使用する方もある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分や野菜を取っていただくよう、気を付けている。個々の体質を配慮した排便コントロール表をナースに作成してもらい、コントロールしている。便秘薬の抜薬についてもナースに報告として挙げている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週2回の入浴の機会は必ず作り、利用者に応じてくれそうなタイミングに声かけを行い同意のもとに入浴していただいている。ゆず湯や季節に応じた入浴もしてもらっている。	週2回を基本に、浴室内の温度調整をして入浴しやすい環境を整えている。浴槽がとて大きく手すりがないため中に浸かるのは難しく、全員シャワー浴になっている。シャワー浴時に足浴をしている方もある。シャンプー類は家から持ってきていても良いがほとんどの方が事業所のものを使っている。同性介助の希望にも応じている。季節湯はしないが、湯上りに柚子茶を飲んでもらっている。入浴を嫌がる方には、時間や日を変えるなどするが、それでも嫌がる時は、温タオルを提供する場合もある。足ふきマットは一人ずつ変えている。	1階の浴槽が大きすぎて実用的ではないのですが、行事として定期的に浴槽につかる日を設けては如何でしょうか。その日は多めに職員を配置し、外付け用手すりの設置など安全面への配慮をしながら、浴槽内での入浴で利用者に爽快感を味わっていただけるような工夫が望まれます。2階の個別浴槽を使用されるのも1案かと思えます。ご一考ください。

京都府 グループホーム安らぎ 1階ユニット

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中でも横になりたいという利用者からの希望があれば、居室で休んでもらっている。利用者によっては、ケアプランに昼寝を取り入れている方もいる。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	タブレットに服薬情報を取り込んでおり、確認したい時にいつでも個々の利用者の薬の情報がみられるようにしている。服薬については飲み込まれるまで、見守りをして確認している。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	メリハリのある1日が送れるよう、施設内の仕事を手伝ってもらっている。出来るだけ職員も一緒にしたり、見守るようにして会話を交えた気分転換をしてもらい、お手伝いに対する感謝の気持ちも伝えている。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	感染症への心配もあり、以前ほどではないが受診などの外出支援は協力している。場合によっては、家族にも協力してもらっている。	北区から事業所が移転したのは全国的に新型コロナの流行期で、周囲との交流を控えていたため、まだ地域に馴染めていない。急な坂道の所に事業所があり、近くに公園もなく、散歩のしにくい環境であるが、春に事業所近くの池の周りの桜を見に出かけている。職員と一緒に髭剃りなど必要な物を買に行くこともある。7~8月にコロナ感染症が発生し、その後利用者の歩く力が弱り、普段の散歩は殆ど出来ていない。家族や職員と通院する機会がある。	事業所が移転した時期はコロナ禍の大変な時期でした。さらに昨年新型コロナやインフルエンザの事業所内発生が追い打ちをかけ、外出機会は激減しました。今後徐々に外出を増やし、利用者の意欲の向上を図り、楽しみを広げられるよう期待します。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭や貴重品は紛失の心配もあるのですべて施設で管理している。個々の現金管理簿で管理し、家族には毎月末に明細を送っている。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙は開封せずに本人に渡している。又、依頼がある場合は家族に転送している。利用者から希望があればハガキ等を渡しており、携帯電話も自由に持ち込んでもらっており、操作のサポートもしている			

京都府 グループホーム安らぎ 1階ユニット

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用スペースには壁にイラストや写真を貼るとともに季節感を取り入れている。芳香剤を置くなど心地よい雰囲気味わえるように工夫している。外に自然に咲いている植物なども取り入れるよう心がけている。	1階のリビングは、南東の窓から明るい光が入り、ゆったりと広い。大き目のテーブルをL字型に配置し、利用者の状態を考慮して席を決めている。利用者はテレビを見たり、職員と話をして過ごし、管理者は、リビングをみんなが集う安心できる場所にしたいと思っている。好みに過ごせるように1人がけの椅子も置いている。壁には、雛飾りの絵や利用者のぬり絵が貼られ、手作りの獅子と一緒に撮った正月の写真も貼られている。キッチンから漂う食事の匂いが五感を刺激している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	目が見えなかつたり耳かとおく会話が成立しない時には職員が間に入ってコミュニケーションをとっている。気があわない為同じテーブルに座れない人は離れて座ってもらい穏やかに過ごせるようしている		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居の際は馴染の物品を持ち込んでもらっている。本人や家族からの聞き取りで、これまでの生活の把握に努めている。入所までに関わったケアマネにも情報提供をしてもらい参考にしている。	各室のドアに利用者名と季節の手作りの作品を飾っている。2間続きの居室の手前の部屋には、下駄箱、トイレ、洗面所、冷蔵庫付きの簡易キッチン、半畳の押入れがある。キッチンは使用していない。奥の部屋には、ベッド、エアコン、カーテンなどが備えられている。畳の上に敷物を敷いておられる方もある。寝具やテレビ、整理タンス、ハンガーラック、椅子やテーブル、お孫さんの書いた絵、家族で撮った写真などを持ち込み、好みのレイアウトをされている。濡れタオルで室内の加湿をしている方もある。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	安全で安心して過ごせるように、見える化に努めている。共用スペースだけでなく居室内にも時間ごとのスケジュールが見てわかるような工夫し、出来る事の継続を目指している。		